



Black Rain  
162.1 x 227.2 cm  
鉛筆 木炭 インク パステル  
色鉛筆 墨 アキーラ等水性着色剤  
和紙  
2015

人類の進歩と調和。1970年、アジアで初めて開かれた万博、「日本万国博覧会（大阪万博）」のテーマである。高度経済成長期らしい言葉だと感じるだろう。しかし、ただ一人このテーマに異を唱えた者がいた。芸術家の岡本太郎だ。「人類は進歩なんかしていない」と断言した彼の作品『太陽の塔』が今も残り、輝かしい万博のシンボルのように屹立していることは皮肉な話である。

1964年に、大阪から遠く離れた鳥取で生まれた山本雄三に、万博の記憶はあるのだろうか？ 当時6歳。物心がつく頃は過ぎていたと思われる。あるいは岡本の言葉も微かに覚えていたのかもしれない。人間を描くことの多い山本。その理由を、「動物と違って、複雑に進化と退化を続けている人という存在に、最も興味があるから」と語る。単に進化し続けるだけではない人類の本質を察知し、そのリアルな姿を芸術作品と

いう形で追い求めているのだろう。写実的な作風。ただし、鳥取の風土を反映しているのか、色数は少ない。そんな山本の人物画は、人間の外観を模倣するだけでなく、その内面をも抉り出そうとしているようだ。集団・個人・性別など立場や環境の違いにより、社会との繋がり方や存在意義が変わる人間。日々の生活の中、人と人が交わることで感じる感動や違和感のようなものを、身近な存在を通して素直に表現していきたいと山本は考えている。その一つの到達点になったのが、第8回前田寛治大賞展で大賞を受賞した『2010年—七月のある朝』だ。モデルは、幼い我が子。それまで不条理がテーマのシュールな作風だったが、テーマを変え、リアリティーが希薄にならないようにと、描くモチーフも身近な存在にシフトした。それが、余計なものを削ぎ落とした、新しいスタイルへの変化に繋がったようだ。

y u z o y a m a m o t o

# 人間のリアルを追い求めて。



2010年—七月のある朝  
162.1 x 112.2 cm  
鉛筆 木炭 インク アキーラ等水性着色剤  
アクリル性下地 パネルに綿布  
2010  
第8回前田寛治大賞展大賞受賞作